

中国伝統音楽、ユネスコ無形文化財——南音

南音は南曲、南管、朗君樂、五音などと呼ばれ、泉州を發祥地とする「中国音楽史の生きた化石」として現存する最古の漢民族音楽の一つであり、2009年にユネスコの「人類の無形文化遺産の代表的な一覧表」に登録された。南音は漢唐代から明清代までの古代音楽の要素を残しており、閩南地域における梨園劇、高甲劇などの劇音楽の基礎となっている。南音は古代の歌舞音楽、詞曲音楽、劇音楽と密接な関係があり、長い間、地域の他の民間音楽と融合しながら、発展し、今日に至っている。泉州地域をはじめ、台湾、東南アジアなど閩南出身の華人が居住する地域にも広く伝わっている。日本でも、かつて唐人屋敷で演じられた劇が泉州の梨園劇と南音と関連性があり、泉州や漳州地域の商人によって長崎にもたらされた、という泉州と長崎との文化交流側面が示されている。

[講演&演奏]

蔡雅芸 (Cai Yayi)

ユネスコ無形文化財——南音の代表伝承者、廈門大学芸術研究所南音研究センター主任、泉州市南音雅芸文化館創始者。

福建省泉州生まれ、小さい頃から南音を学び、数多くの民間芸術家から、南音音楽の伝統を受け継いだ。独特な演奏芸風により南音音楽界の注目を集める。2000年よりシンガポール湘雲音楽社音楽総督、シンガポール城隍芸術学院芸術総督を歴任。2010年、イギリスで開催された国際伝統音楽コンクールに受賞。2013年に「南音雅芸文化館」を創立し、以来中国国内外で活躍



陳思来 (Chen Silai)

廈門大学芸術学院客員教授、泉州市南音雅芸文化館総督。2006年より「泉州南音研究・記録」などのプロジェクトに携わり、南音の収録や琵琶の演奏を担当。2008年にシンガポールへ赴き、シンガポール城隍芸術学院芸術企画者、世界南音聯誼会理事を歴任。2015年に「南音雅芸文化館」とともにジュネーブに国連が主催した南音文化交流活動に参加。



曲目

梅花操 (ばいかそう)

南音の四大名譜の一つで、五つの楽章から成る。「操」即ち「情操」のことで、曲名は厳冬に開花する梅の精神への賞賛に由来。南音の伝統は合奏における演奏者間の交流及び精神的世界の追求。南音は中国の人文的精神世界を反映する現代風「社交」音楽と称される。

共君断約 (きょうくんだんやく)

南音の古典曲、『陳三五娘』の伝説から抜粋。陳三と黄五娘との愛情を物語る。南音の演唱は“泉腔”という泉州地域にかかる独特な節を用い、「唐音」と呼ばれる古代言語の遺風を持つ。演唱者は「咬字」「吐音」などの歌唱法を用い、伴奏者と交流しながら、「歌詞」と字音を通じて、曲の情緒を表現する。

醉落花・四宝 (すいらっか) (打楽器と琵琶の合奏曲)

南音の演奏形式には「上四管」「下四管」に分けられる。「上四管」とは、南音に用いられる弦楽器と管楽器、つまり琵琶、洞簫、二弦、三弦など楽器の総称であり、「下四管」に使われる楽器には響盞、小叫、双鈴、四宝など打楽器がある。

清凉 (せいりょう)

南音の新作。弘一法師『清凉歌集』の詩を歌詞とし、伝統的な創作技法を用いて作曲。弘一法師は中華民国時代の禅僧、教育者、詩人、芸術者。本名は李叔同。生前最後の10年間泉州に住した。

四時景 (しじけ) (器楽曲)

『四時景』は二十四節気を表現するもので、『梅花操』、『走馬』、『百鳥帰巢』と並びに南音“四大名譜”の一つ。